

## 6. パネルディスカッション - 「草原再生から阿蘇の地域づくりへ」

コーディネーター：

\* 坂元英俊氏 / (財)阿蘇地域振興デザインセンター事務局長

パネリスト：

\* 高橋佳孝氏 / (独)農業生物系特定産業技術研究機構近畿中国四

国農業研究センター主任研究官

\* 井 信行氏 / 畜産業、阿蘇フォーラム委員長

\* 中村太士氏 / 北海道大学大学院教授

\* 長野良市氏 / 写真家

関係行政機関

\* 金田和洋氏 / 熊本県阿蘇地域振興局長

\* 引地和明氏 / 農林水産省九州農政局生産経営流通部長

\* 新井正久氏 / 環境省九州地区自然保護事務所 所長



(図 33：パネルディスカッション風景)

坂元 コーディネーターをつとめさせて頂く(財)阿蘇地域振興デザインセンター事務局長の坂元です。

皆さんが阿蘇にドライブに行く際には草原を通って行くことが多いと思います。当たり前には存在していると思われがちな草原ですが、実際、維持していくためには、非常にたくさんのご苦労があったり、いろいろな課題が存在しています。この課題とどう取り組んでいくべきか、それは阿蘇にとっても、また、阿蘇を取り囲む地域あるいは日本にとっても非常に重要な事柄になっています。

さて、阿蘇くじゅう国立公園の中に、阿蘇五岳、それを取り巻く世界最大級のカルデラ、そしてその中心的な存在である草原が、千年以上の時を超えて、今阿蘇の地域にあります。

阿蘇の風景、動植物、農業畜産、水の源流、そして草原文化といったものがそこにあり、一方で草原は危機的な状況を迎えている。そんな中で、今日は草原再生をキーワードにして、これからの阿蘇のために、草原再生あるいは地域づくりをどのように進めていったらいいのか、そういう観点から議論を進めていただきたいと思います。草原再生に関わらず、もっと広い範囲についても、

考えることができないだろうか。そういうところまで到達できればよいと考えています。

最初に、パネリストの方々から自己紹介を兼ねて、それぞれの立場での思いを語っていただきたいと思います。まず、高橋先生に、映像を使ってお話をさせていただきます。

高橋 島根の近畿中国四国農業研究センターからまいりました高橋佳孝です。私は県外の間人ではあるものの専門が草地・草原ということもあり、一の宮町にお住まいの大滝典雄さんに連れられ、随分と阿蘇を訪ねさせていただきました。また、九州の小倉の生まれで、小さい時から阿蘇を訪れていて、私なりの原風景が阿蘇にあったこともあり、「阿蘇は随分変わったな」という実感もあります。

先程からお話があるように、阿蘇は人とのつながりととても問題だろうと思います。また、阿蘇の場合も、釧路と同様に川の上流・下流のつながりはとても大切な問題で、九州の6大川の水源地域になっているわけです。阿蘇の草原を守ることは下流の皆様の水源を守るということにつながり、そういった意識からいろいろなボランティアが発祥したという経緯もあります。そういう意味からも、やはり阿蘇はとても大切な所だと前置きさせていただきます。

私の研究領域は草地・草原の、特に放牧が専門ですが、今日は少し違った観点からの問題提起も含めて、スライドでお話をさせていただきます。

### 昔の循環型の草資源利用のあり方

昭和30年代ぐらいまでの阿蘇の牛を中心とした草資源の有効利用の流れをみると、牛1頭を育てるために干草用の草刈り地が50アールぐらい、また150日放牧するとして、牛1頭につき1~2ヘクタールぐらいの草原が必要でした。さらに、牛が畜舎で食べ残した草と糞がまじってできた厩肥や、採った草を水田に投入して、お米を収穫するという草の利用形態があったのです。この循環には、私たちが参考にすべき内容を随分含んでいます。

### 草の利用を中心とした阿蘇の文化

草の流通や循環の中から生まれたのが様々な阿蘇の文化です。様々なお祭りや催し物は草の文化と言っても過言ではない。これは北海道とは違う文化の形態です。

阿蘇の人に「植物の希少種はどこにありますか」と聞くと、「墓場に行けばある」と言われます。盆花と言われ、墓場に当たり前のようにあった花が、いまや、希少種として大事にされる時代になってきました。環境省等によるレッドリストに、阿蘇の草原の花がたくさん登場しています。

### 利用のしかたによって草原の植生が変わる

阿蘇の草原は火入れをしたり草を刈ったり放牧をしたりすることで守られてきました。草を刈ったり放牧をす

ること自体が草原を維持することでもあったわけです。火入れと採草が繰り返されれば、ススキやネザサの草地になり、牛がずっと放牧されれば短いシバの草地になる。一見同じように見えても、中に入ってみると、複雑な植生や利用形態があります。

例えば採草地ですが、秋に草を刈る場所には、ユウスゲ、カワラナデシコ、あるいは希少種の大半が生えます。

また、火入れを行えば春先に明るい状態になりキスミレなどの植物が生育します。

放牧地には牛が食べ残す有毒植物にとって都合のいい生態系が出来上がります。ミヤマキリシマやオキナグサなどの草原植生ができるのはこのためです。

#### 草原を支えるボランティア活動や環境省事業

私達は、草原保全を目的に2年に1回のペースで全国的規模の草原サミットを実施しています。第5回は阿蘇でやったのですが、その発表の中でNPOを中心にいろいろ技術が実現してきました。一つがボランティアです。いまや阿蘇では年間延べ1千人近いボランティアが参加し、牧野の管理のお手伝いをしています。

また、モーモー輪地切りや、小さい樹林を草原に復元する事業も実際に行われるようになってきました。

モーモー輪地は三瓶山で、最初に取り組んでいたものを、大滝さんに紹介し、阿蘇で実施しているうちに、すっかり阿蘇が本場になったものです。(図34)



図 34

今、最も低コストな牛の飼い方は、冬場でも牛舎の中に牛を入れずに、1年中外で飼う周年放牧です。これは、草が余っているから可能な技術でもあるのです。

昔は、草の循環が行われていましたが、今ではほとんど草の価値がないということで利用されなくなってきています。しかし牛の餌としては今も価値がある。畜産農家を維持することは、草地の維持管理をする人たちの人数がそのことである程度守られることにつながります。そういう意味で、牛を増やして畜産農家が減らないようにすることは、重要な目標です。

#### もっと草を積極的に活用して草原再生を

昔は様々なかたちで、稲わら、草などが利用されてきました。いまま波野の高冷地野菜の指定地などでススキやネザサなどを含んだ堆肥を作り使っています。一の宮のトマト農家は、ススキの堆肥をたくさん利用されてい

ます。ジネンジョでもアスパラガスでも非常にいいものができそうです。産山の花農家では、ススキを使った堆肥で非常に花もちの良い花の苗を出荷しています。

環境省では草原再生シールを使った取り組みをはじめました。これは、阿蘇の草原の野草を堆肥として利用した農産物にこのシールを付けて売ることによって、少しでも草原にかかわる人、その生業を通して関わる人を見出そうという取り組みです。今は、あぜり庵や四季彩などの直売所で草原再生シールを貼った野菜を販売しています。今後、草原再生シールに取り組んでいる農家のグループが一つの団体となって、研鑽する組織が作られるということです。

さらに、かなり先の話になると思いますが、草をエネルギーとして利用していくことも検討されています。ススキはエネルギー作物としてヨーロッパで脚光を浴びており、日本からススキを導入して休耕地に植えて、エネルギー生産を試みています。電力を生み出すコストはススキが一番安いということも分かっています。

長崎で開発された農林バイオマス3号というガス化の熱と電力とガスを産出するプラントでは、ススキのような草も十分利用できます。(図35)



図 35

私の調査では、ススキは秋の干し草を刈る時期に刈ると、毎年生産力を維持できるのですが、6月～8月に刈ると、生育がだんだん落ちてきます。ススキの生育が落ちると、逆に随伴している希少植物は生育しやすい状況になります。ススキがほどんどに生育しているところにはオミナエシがたくさん生えてくるということです。

盆花や大陸系遺存種は、実は採草地にたくさん生育します。草花を守ろうとすれば、草を利用するシステムを何か考えないといけない。ただ野焼きしているだけでは守れません。これは、九州バイオマスフォーラムの考えている草資源流通ユニットですが、この流通が上手くいけば無駄なく利用することも可能になってくるのです。

採草は地域循環であるという話をしました。要は、放牧という形態は放牧場で物質が自己循環している、閉鎖空間での素晴らしい生態系なのです。もっと広い範囲で見たら、草を使い回すことが地域循環として、お金を生み出すいい機会になるかもしれない。都会の方に草原シールを貼った野菜を何キロ食べていただければ、何キロ

の草刈りができますという話にもなるわけです。そしてやがては希少な植物がまた草原に生えてくるという一つのインセンティブにもなり得るわけです。そういう仕組みを私たちはこれから考えてみたり、提案してみたりしたら面白いのではという話をさせていただきました。

坂元 ありがとうございます。草には価値があり、それを高めるためには草原の循環を行っていくことが必要になってくる、これからの草原の使い方を昔のように戻していくことが必要であるというお話だったと思います。

井さん、畜産の立場から、一言お願い致します。

井 産山村で畜産業をしている井です。「さわやかビーフ」という牛肉の販売・加工所を村に作っていただいて、産山村の仲間たちと一緒に、あか牛肉を販売しています。

去年の12月からトレーサビリティつまり肉の生産流通過程がきちんと分かるようにしなければならないという法律ができました。私たちは自分たちで子牛を育て、肥育し、肉牛を作り、そして販売をすることで、トレーサビリティをもう7、8年前からやってきています。

現在、BSE（狂牛病）問題で、生産者の顔が見える牛肉生産を求められるなど、安全性の面からマスコミを含めて全国から強い関心を持っていただきました。おかげさまで「さわやかビーフ」は人気が高まり、部位によっては肉が足りないという状況になっています。そういう状況の中で、模索をしながら安全性が高く体に良い、生産者の顔が見える牛肉販売をやっていきます。

原点を辿ると、二十数年前、元九州農業試験場にいらした滝本先生が私たちの組合で代償性発育という牛の生産技術を教えてくださいました。まず子牛の時に粗飼料をたくさん食べさせて健康な内臓を作る。その健康な内臓をもった牛から安全な牛肉を作る。これをずっとやってきました。

現在、草原再生の問題も含めて、草資源を活用した安全性の高い肉用牛生産、販売について皆さんに非常に興味を持っていただき、我々も一生懸命頑張っているところです。今日は新しい光が少しでもこの会合の中で、阿蘇に生まれてきたらありがたいと思っています。

坂元 ありがとうございます。さわやかビーフの牛肉はTV番組「どっちの料理ショー」などでも取り上げられていました。

次に長野さん。記念トークではなかなか思いのところまでお話しできなかったようなので、またここでもう一つお願いを致します。

長野 明日から私が住んでいる村は南阿蘇村として正式に発足します。それで先日、長陽村の閉村式がありました。5千人の村でしたので、いろいろな役を仰せつかつ

ていまして、閉村式にも招かれて最初から最後まで見たのですが、その中でいくつか気付いたことがあります。

式の最後に、3小学校1中学校の代表の子供たちに、自分が住んだ村、生まれて育った村の良さを作文で語らせたのです。子供たちは「緑の草原に囲まれて非常に自然環境のいい所に育って本当に良かった。」と涙を流すような感じで語っていました。それを、大人はどういう目で、どういう耳で聞いていたのかなという思いがありました。やはりその地域にある環境、伝統など受け継がれてきたものは、ちゃんと学校で、教室の中で教えられているんだなと感じました。

しかし、同時にどのくらい阿蘇山に登ったことがあるかと問えば、阿蘇に住んでいながら阿蘇山に登ったことは何回もないという子もいるかもしれないわけです。

私は長陽で生まれ育ち、四十数年生活していますが、写真家としてはある意味で「外なる目」をもって見ており、内なる目、外なる目というふうに分けています。

私たちの下田地区では、烏帽子岳の南山麓を野焼きの場所として与えられています。野焼きは公役なので、畜産農家であろうがなかろうが、あるいは農業をしていようがいまいが、各家庭から必ず1人出なければならないのです。そうすると、体を鞭打って出てくるご老人もいるわけです。そうでないと、公役金を払わなければならないからです。でも、多分そういう方々は、具体的に草原を守る、草原維持に参加するのは、野焼きに参加するこの1日だけ、365分の1日だけではないかと思っています。それで本当に阿蘇のこと、あるいは草原のことを大事だと思っているのかなという思いがあるわけです。

私は写真を撮る人間として阿蘇を廻っています。四六時中、車を走らせて阿蘇の素晴らしい所を写真に撮って皆さんにお見せするのが仕事です。農業・畜産農を営んでいる人は、仕事として原野に出るでしょう。しかし、阿蘇に住んでいてもいわゆるサラリーマン生活を送っている方々は、どのくらい阿蘇に住んでいることを意識しているかということ、問うてみたいと思います。草原を守らなければいけないという意識をもっと阿蘇に住んでいる方に持っていただきたい。

少子高齢化という時代の中で、生涯学習、学校での総合学習という言葉がありますが、ぜひとも町村合併をきっかけに、地域に住んでいる人間も、例えば1年に1回、あるいは季節ごとに1回、山に登ろうというようなプログラムが学習の中に組み込めていったらいいと思っている長野です。

坂元 たしかに、自分たちが草原をどれくらい大事に思っているかを突き詰めたことはないですね。そういう機会を増やしていくべきだと思います。次に行政のほうから、今後の取り組みなども含めて、お願いします。

金田 阿蘇地域振興局は熊本県の出先機関で、人口が7万6千程度の阿蘇地域を200人程の職員で管轄しています。

私は、阿蘇地域に勤務するのは2度目で、前は30年ほど昔でした。その頃から人口は1万人ほど減っており、非常に大きな問題だと考えます。現実としては、更に少子高齢化が進み、生業に就いている、元気のある方々が非常に少なくなっている。

私どもも、地域を元気づけるという意味の地域振興局という名称になって5年になります。今、阿蘇は年間1,900万人余の観光客をお迎えしています。本日は阿蘇の草原の再生が取り上げられていますが、大きな景観的な財産、活動する火山、その恩恵を受けている温泉、そういった阿蘇にあるものすべてを生かしていくという役割を振興局は担っています。地域の皆様と共にやっていかなければならないのです。

ただ、行政ができるのは、地域住民の皆様方のお手伝いを側面的にさせていただくという立場ではないかと考えています。すでにいろいろな施策を取らせていただいています。例えば耕畜連携。これは処理が必要な牛馬等が出した糞尿等を自然の循環のなかで処理し、生かしていく方策です。地産地消では、生産物にできるだけ付加価値を付けてその地で消費していただくというかたちを考えています。

あか牛についてもブランド化という手立てがございます。しかし、ブランド化を地域活性化の手段にすると、どうしても残りの部分が出てきます。残りの部分に付加価値を付けて地域の皆様方の所得に少しでも寄与できるようにすることが、大切ではないかと考えます。

本日はパネリストの先生方、会場の皆様方から、行政サイドがいかに動いていくべきなのか、方向性を示していただけのではないかと期待をしながら参加させていただいています。

坂元 ありがとうございます。次に、農林水産省から引地さん、お願い致します。

引地 九州農政局の引地です。私からは、今後の畜産あるいは地域の資源の保全について、今農水省が考えていることを、二つほどご紹介させていただきます。

一つは畜産の問題です。向こう10年、あるいはそれ以降の畜産、特に肉用牛生産をどうするかということについて検討していますが、家畜生産は人と牛と草、この三者が調和しないと、うまくいかないと思います。この「三位一体」が、将来の問題を考えていく上でのキーワードになっています。

人は担い手、牛の生産者

、牛はここで言うとかか牛です。草は、行政的な言葉では自給飼料と言いますが、これはまさに野草や採草地

から採った牧草のことです。この循環がうまくなされるようにしていこうということです。

日本は食糧自給率が低いということをよく聞くとありますが、畜産の場合も、外国から餌を買って牛や豚に食べさせます。結果として自給率が低いものになってしまうわけです。それから、現在は労働力も餌も多投入の生産であるため、コストがどうしても割高になりますが、草地を使った生産は省力化によりコストが安くなります。また、担い手が少なくなっていますから、省力生産を求めないといけない。そういったことから、牛、草、人が三位一体となった生産体系を模索していく時代になってきています。

翻って阿蘇の畜産を考えた場合、まさにこの人、牛、草の実践の場なのです。そこで今日のテーマである、阿蘇の草地の維持・再生ということは農政の立場から言いますと、放牧畜産の再生が鍵ということになります。これは経済活動ですから、持続的であることが非常に大事ですし、財としての牛、草であるということが非常に大事です。ただ見て「きれい」というだけではなく、経済活動として持続するものである必要があります。

そういう観点から、阿蘇における農政の課題としては、担い手や牛の減少があります。現在、170くらいの牧野組合の方が牛を飼い草地を管理していますが、高齢化等々で畜産農家が減少しており、牛も少なくなっている。そうしますと、高橋先生がおっしゃったように、草はたくさんあるけれど牛がいらないということになり、草原が維持できません。

それで、これからは牛を広い地域から集める。牧野組合以外、ほかの県や阿蘇の平場のほうからも牛をあげて飼うということが大事だと思います。また、阿蘇の草地は入会地が多いのですが、この入会地を調整し、組合員以外の人にも使っていただけるシステムをつくることもしていかなければならないと思っています。

最後に、やはりあか牛の牛肉を買って食べていただかないといけないわけです。この飽食の時代においては、食べ物もストーリー性がないと買っていただけない時代になっています。そういう意味、あか牛は、阿蘇の自然の中で生まれ、草で育てられたため、健康志向になじむという、ストーリーを持っています。更に、トレーサビリティ（生産履歴）が、今非常に大きな問題となっています。阿蘇で生まれた子牛を阿蘇で肥育して肉になるまでの履歴が明らかであることが消費者にアピールする時代になっています。その辺りをみんなで知恵を出し合いながら売っていくことが大事ですし、農水省も熊本県と一緒に地産地消、自分たちの地元のものを食べようということ、お子さんたちに食べ物の大事さを訴えていかなければいけないと感じています。

2点目は、農水省としても地域の資源、農地、水路等の保全をどうするかということが重要です。いろいろな

方々が連携したかたちでの地域の保全が求められるようになり、牧野組合の方はもちろん、地域住民、都市住民の方も含めて、地域資源の保全をどうすべきか考えること、それは、まさに今日のテーマだと思います。そして、農水省としてどういうお手伝いができるのかということは、まさに今検討中で、3月にその方向を出したいと思っています。そういった意味で、今日このシンポジウムに参加して勉強させていただきながら、いろいろ当局のほうにもつないでいきたいと思っています。

坂元 ありがとうございます。食べ物のストーリー性というものが今後ますます重要になってくるというお話も交えてお話しいただきました。それでは環境省のほうから新井所長、よろしく願い致します。

新井 私は3年前の7月に北海道釧路からこちらに参りまして、先程中村先生からお話がありました釧路の自然再生事業の立ち上げのころに釧路におりました。

中村先生から、横文字でパッシブ・レストレーション（受動的な自然再生）というお話がありましたが、釧路で受動的な再生を経験したあと阿蘇に来て、阿蘇は北海道に負けずに広いなと最初に印象を持ちました。そして、草原の状態がまさに危機的な状況になっている中で、私の着任前からいろいろな取り組みが進められていましたが、自然再生という観点から取り組む際に、しばらくは釧路の頭から抜け出せず、かなり自問自答したところがございます。まさに二次的な自然であり、中村先生のお話からすれば人間として能動的に、アクティブに再生につなげていかないといけないということを実感したのです。

パネルディスカッションのテーマ「草原再生から阿蘇の地域づくりへ」は、事務局で設定させていただきましたが、阿蘇の草原は、地域の人たちの営みで維持されてきたものであり、阿蘇の草原が健全な状態であれば、その地域が健全であるという、いわゆる地域の活力のパロメーターにもなると思います。地域の農業、畜産業の元気が良く健全であれば、阿蘇の草原も健全で良好な状態が維持できるということになるかと思っています。

またその結果として、年間1千数百万の観光客が来てそこにお金を落とす。今の県の観光統計を見ますと、阿蘇に来る観光客は年間750億円のお金を落としていますが、草原を維持している牧野組合の方々にはなかなかその恩恵が回って来ていないという実情があるのではないかとこの気もしています。

ですから、これからは地産地消を通じ、更に地域の農・畜産業、観光業、あるいは商工業が活力を増して、地域の方々が自分たちのふるさとに誇りを持つ、あるいは心の豊かさを取り戻す、そういうふうにつながっていけばいいと思っています。

先程、草原再生シールのお話もさせていただきましたが、環境省としてここまでやっていいのかという気もしながらやらせていただいています。また、環境省はあくまでも試行的なこと、実験的なことしかできない。環境省だけでは何もできないので、やはり地域の方々と行政の方々、あるいは行政同士、NPOなどとの連携、さらに専門家の方々のご指導の中で、総力を上げてこの阿蘇の草原の取り組みを進めていきたい。それを地域づくりにつなげていきたいと思っていますところ です。

坂元 ありがとうございます。草原を再生していく技術的な部分はもちろん、そこに人的な取り組みをすることが非常に大きな要素になっている。あるいは、阿蘇の持つ草原や自然の素晴らしさを、いったい地域の人たちがどこまで感じ取っているのか、そういったことを含めてお話があったかと思っています。それぞれのお話を伺いながら、総合的に草原というものを見つめ直していく必要があると思います。

平成15年の、阿蘇で行ったエコツーリズム全国大会の時にアメリカのモンタナ州にありますイエローストーン国立公園から、スティーブ・ブラウンというエコツアーの専門家の方が阿蘇に来られました。一緒に草原の中に入っていったのですが、ブラウン氏は、草原の押戸石山という丘に登って、そこから望遠鏡ですっと見ていらっしやいました。その場所から久住まで大体15キロぐらい、阿蘇五岳までも15キロぐらい。360度草原が見渡せるものですから、30キロ四方ぐらいにどれくらい人工物があるのか見ていらしたのですね。そして、こんなに町が近いのに人工物がほとんど見られないと言われました。彼は、阿蘇に来て、知床などの自然と比べても本当に遜色がないぐらい広大な自然景観を持つ草原と、人工物のなさを、非常に高く評価していました。

さらにミルクロードなど草原の中を通る道を車で走っていると、何キロも看板が見当たらないということがまたすごいと言われました。私はその時、私たちが当たり前だと思っている状況が、実はものすごく価値のあるものだとの認識を新たにしました。そして、このことを深く考えていく必要があるのではないかと思います。

そういったことも踏まえて、草原を再生していく上で、または地域づくりという観点から見て、この阿蘇という国立公園の価値を、もう1回議論の中でうかがっていきたいと思います。長野さん、その辺の観点からお話しただけですか。

長野 私には阿蘇の国立公園に住んでいる誇りがあるのです。「阿蘇はどこにあるか」と聞くと、遠く関東方面の人たちは「どこにあるか分からない」と答えるそうです。国立公園に住んでいる誇りを持っていながら、「日本の国立公園はいったい何だろう」と考えることが時々

あるわけです。今回は、まずそのことについて二つお話ししたいと思います。

一つは、草原といっても、一般的に見て種類が三つあります。子供たちも、あるいは都市部に住んでいる人たちも、その区別は分かっていないのではないかと思います。三つの種類とは、一つは、牛が放牧されている牧野である緑の草原で、二つ目は、野焼きをすることによって特有な植物が育っている草原、そして、三つ目はゴルフ場です。阿蘇にはゴルフ場がたくさんありますからね。僕の感覚で言うと、草原と称するものにはこの三つの種類があると思うのです。私は、草原を再生する意味においては、いわゆる北方系植物、あるいは大陸系遺存植物がたくさん生育している阿蘇の草原を維持する、守っていくことが大切だと思っています。

また、例えば屋久島では白谷雲水峡や屋久杉ランドという、屋久島を代表するような所に入るためには、お金を払ってゲートを通るのです。お金を払わないと入っていけないシステムが阿蘇にもできないだろうかと思います。つまり、生業として野焼きをすると、確かにボランティアの方々にお手伝いいただいて維持されているという現状があるのですが、野焼きをすることによって維持される草原を守るために、入場料の徴収ができないだろうかと思います。

先日行った、上海郊外の周荘（シュウソウ）、同里（ドウリ）、烏鎮（ウーチン）などのきれいな町に入るときにも町の入口のゲートでお金を払われます。よそ者と地元の人とは区別できるというわけです。それを見た時に、いわゆる地域に入る時にお金を払うことは考えてみる余地があるのではないかと思います。

その際は、今まで行われてきた取り組みを調整していただき、観光客の来る風光明媚な所、例えば大観峰の周辺を特別な区域と設定して管理できるような状況の中で、写真も撮れるし、あるいは自然案内人協会の人といっしょに野草観察もできるというようなかたちができないだろうかと思います。それが第1点です。

もう一つは、今回パネリストを務めるにあたって若干勉強させていただいたのですが、景観工学では、景観は10年から20年のスパンで見るときの言葉で、風景という言葉は百年、さらに、風土は千年単位で見るといえます。そのことを勉強して驚いたわけですが、私が写真を撮り始めてせいぜい22年ぐらい、まだ景観としての阿蘇を見ている最中です。

そうした中で今回非常に気になるのが、あえて言わせていただくと、西原村に建った風車の件です。景観工学では、見る位置のことを「視点場」と言うそうです。「視」は見る、「点」はポイントでしょう。「場」は場所の場ですが、写真を撮る際も撮影するポイントあるいはポジションを探し求めて、一番象徴的な場所に三脚を立てて写真を撮ることになります。

道路ができると、その恩恵を被って便利な道を使いませぬ。私も最近依山トンネルができたおかげで、市内の健軍から自宅まで40分で帰れるほど便利になりました。それぐらい、熊本都市圏との距離感は近くなりました。ところがその時に風車が建ったのです。

私は、「建てるな」と言うのではなく、何故あの山の稜線に建ったのかが分からないのです。阿蘇を広域的に見ようとした時、今後は阿蘇の中岳の煙に引っ掛かったかたちで風車が回っていくわけです。実際建ってしまったから、私が今後生きていく中で受け入れなければいけない景観なのだと思っはいるのですが、最近に気になってしかたがないことです。

幸せ感には個人差があるとは思いますが、国立公園の中でだれもが共有できるような美的感覚を持つことのできる場所やポイントが絶対あるはずだと思います。今私が言っているのは空港辺りから見た風景ですが、今後どういう具合に理解していったらいいのかと、そこを通るたびに思ってしまうのです。このことを、国立公園の中にいる人間として、二つ目の話題として提供しました。

坂元 ありがとうございます。最初の話では、景観、風景、風土というのはそれぞれに10年、20年、百年、あるいは千年という見方で見ていかないといけない部分があるということをお教えいただきましたし、また、どうしても風力発電の風車が気になるということについて、高橋先生、中間的な立場に立って話をするならば何かございますか。

高橋 長野さんがおっしゃった通りではないでしょうか。風土として見た時に、後世に遺恨を残さないということが大切ではないでしょうか。逆に言えば、釧路で蛇行する川を造る時に、直線化した川を壊すのと同じで、後世の人たちがこれはおかしいと言った時にそれを壊せるシステムがあるかどうかは私としては気になります。そういう責任はきちんと自分たちで持つということが必要ではないでしょうか。牧野を守る上では牧野の人たち、あるいはその入会権を持っている人たちが責任を持てるシステムが基本にあってほしいと思います。

例えば、阿蘇の場合は175以上もの牧野組合があります。十把一絡げで言えないところがたくさんあって、場合によっていろいろ違います。例えば今でも年に一度野焼きには入会権を持っている方が参加しなければいけないというシステムがあると同時に、地域の人たちにとっては年に1回みんなで顔を会わせる唯一の場所でもあるわけです。

そういう意味ではとても大事なのかなと、傍からは見えているわけです。むしろ、地域の人たちが自分たちは自家用の野菜も作ってるし、お米も作っているのだから、牛は持っていないけれども草原の草が利用できるシステ

ムがあったり、あるいは牧野組合の人たちが草を集めて、それで要らなくなったものを地域の人たち、入会権を持っている人たちがまた使っていて、その人たちがまたお金を生み出していくような、そういうつながりを持つということも考えてもいいでしょう。

そういう意味では、都会の人たちのあこがれである牧野の景観は、実は阿蘇グリーンストックのボランティアが守っているだけではなく、地域の中では牛を飼っておらず、野焼きにはあまり出たくないけれど、自分たちの財産だから守らなくてはいけないと思っている入会の人たちがボランティアとして守っている場合も少なくはないと思うのです。

そういう意味で実際に地域に住んでいる人や、農業をやっている人たちが何らかの草の恩恵を被るようなシステムを作ることを共通の認識として考えていき、それぞれの牧野で工夫をしていくのがいいのではないかと思います。畜産が元気な所は畜産でどんどんやっていただいて。もし牛がいなくなったら、草を利用したい人が利用できて、お金が儲かるようなシステムをみんなで考えていけばよいのではないのでしょうか。

それから、エネルギーの話だったら、風力は、エネルギーの先進国でもほんのわずかなシェアでしかないのです。ヨーロッパではバイオマスエネルギーのシェアの方が高いのです。バイオマスは植物を使ったエネルギーのことです。そういう先進地の歴史性も日本人としては学んでいく必要があるのかなと思います。

坂元 ありがとうございます。何を阿蘇の価値としてとらえていくかということで、今の風力発電についてはバイオマス発電だとか、太陽光発電もあるので、阿蘇に似合う新エネルギーのあり方を考えるべきではないかということで、長野さんの提言に対してお答えしておきたいと思います。

今日は自然再生をキーワードにして幅広く見ていこうということで、こういった景観維持の話も大事な取り組みの中の一つの要因ではあると思います。草原を再生していきながらも、国立公園という誇りをもっていくために、阿蘇地域としてどういう選択をしていくのかといったところまで踏み込まれてくることなのではないかと思っています。今の話の締めで行政のほうからこれは言うておこうということはございませんか。

金田 非常に重いテーマですね。ただ一つ思いますのは、本来ある利用すべき形態、それがその地域ごとに本義的にある程度、全体的なコンセンサスを得てちゃんと確立されるべきであるということです。その地域、例えばご指摘があった地域で果たして風力発電が本当に必要だったのか。そこのところが本当は検討されていないのではないか。そこのところが一番大切ではないかと思っています。

全体的な利活用、それに対する手当て、そういったものが本義的に検討されているかどうかということです。行政としては、地域住民の皆様方のご意見を集約し、それをお手伝いするのが役割であり、地域住民の皆さんの要望が様々だと、行政がどれに従うべきか決めるのは非常に難しいのですが、この場に出席させていただいて皆様方のご意見を聞き、そういった中からある程度の方向性が出ればありがたいと思うのです。

坂元 この辺で風力発電については一応おしまいにして、草原の価値を見直し、草原を活用して地域づくりを進めていくことについて、中村先生からコメントをお願いします。

中村 釧路、若しくは北海道のほかの自然再生事業を思い浮かべながら、今、皆さんが話されていたことを聞いていました。釧路では再生事業がなかなか日常性に入っていないのです。非日常的な時間と空間の中でやっているという印象を私自身ずっと持っているのです。そして、そうである間は本物にはなれないという答えも分かっているのです。

私は、再生事業なんていう仰々しい名前はもういいのではないかと思います。自分で推進して言うのもなんですが、自然を再生するなんておこがましいということだと、半分は思っていました。

だからこそ阿蘇がうらやましいと思うのは、皆さんの場合、話題が日常にずっと入っていきけるのですね。もちろんかかわり方の温度差はあるので、その地域の人々によって違いはあるとは思いますが、先程のボランティアの方たちの話を聞いていても、畜産業と結び付かざるを得ない、そもそもが、この草地を維持していくためには生業と結び付いたかたちでしか考えられない。若しくはボランティアの参加しか考えられない。そういったシステムがあるということは、再生事業そのものがずっと日常の中に入っていけるという、それがうらやましいし、まさにそれが重要だという感じがしています。

日本がこれだけの借金を背負った時代ですから、自然再生とって特別な土地を買って特別な事業をやるということは、もうできなくなってくると思っています。むしろ普通の公共事業等の中に、自然再生という思想がどう生きていくかということを考えていったほうが絶対に広がると思うのです。例えば河川の自然再生は、河川整備計画の中に入ってくるべきなのです。わざわざ自然再生などという言葉を使わなくても、考え方は入れられるはずなのです。

阿蘇は、入会の問題を含めて問題はたくさんあるでしょうが、それが逆に求心力となって地域の人たちがずっと入っていけるような、間口があるなあという感じをうけました。

そういう意味では、あまり行政に頼らないほうがいいのです。個人の方々はいろいろなことをやりたいのだと思いますが、行政は縦割りで自己完結型で終わるような縛りの中でしか生きていけないのです。だから、広がっていかない。ある仕事を終えたらそれでおしまいなのです。でも、地域の人たちが主体的に動き出せば、どんどん面白い輪ができてきます。NPOの方々や、ボランティア活動の方の話の話を聞いていると、本当に楽しそうにやっている。顔もいいですね。行政は仕事でやるから全然面白くないのですね。

先程説明があった様々な草原の再生事業はそういった間口を持っているし、行政を活かすようなかたちで、地域が盛り上がっていけば、一番うまく将来に向かっていけるのかなという感じがします。

それも、できれば、より具体的に進めるのがいいと思います。一般論での草原再生ではなくて、地図の上でどこをどう残していくのかということをも具体的に考えてみるのです。そうすると、ここでは畜産をやっている方がだんだん少なくなっているとか、ではここにボランティアを投入したらどこまでできるのかとかということになってきます。ただ、ボランティアだけに頼るのは無理です。里山の管理にしても、ボランティアでは実際の森林の0.01パーセントくらいしか管理できないという例があります。

どこかで、折り合いをつけていくしかない部分は当然でてくるので、それを一般論でやっているとしても話が漠然としてしまう。ですから、生物多様性の問題から希少な植物が生える場所についてはどうするかたちの管理が必要なのか、もしくは畜産業として重要な場所、草のよく育つ場所ではどんな管理が必要なのか、といったことを、より具体的に地図の上で議論していくと、地域の人たちも、なるほど行政はこう考え、われわれはこう考えてやっていくのだということが見えてくると思います。ぜひ、そのようにやっていただければと思います。



(図 36: 「地域の人たちが主体であることが大切」と語る中村氏)

坂元 ありがとうございます。暮らしと再生とが密接な関係の中で行われていけないといけないということだ

と思います。自然は再生できても、地域の再生はなかなか難しいですね。地域がそういったものに対応していきように変容していかないといけないということかもしれないと思いました。井さん、草原の中で暮らしていることに誇りを感じるというか、恵まれた草原のなかで牛を育てるということが、逆に価値を持つという部分もありますね。そういったものも含めて、都市に向けてのアピールもあるかと思います。その辺をお話いただければと思います。

井 私には村で百姓をする以外に何もできないわけですが、地域の農業に元気が出れば、草原を維持していくことは簡単だと思います。それができないのが今の状況です。

先程お話ししましたように、BSE問題等で、牛肉の安全性が重視され消費者が少し変わってきた。この様な時こそ、私たちは自分の村の良さなり、草原の大切さをアピールせにゃいかんと思います。

ところが、農業者はそれが下手なのです。働くことはうまいですが、外に出ることが下手なのです。だから、これからはそういうことをやっていかにゃいかんと思っています。日本の肉用牛の飼育は、多くは粗飼料で行っています。穀類は100パーセント近く外国のものを食べさせていますし、藁とか草、牛とかも外国から輸入しています。そういう現状の中で、私たちの阿蘇は牛が自分で草を食べるといすごい所なのです。

阿蘇の自然を有効活用すれば、無理せず飼料ができ、コスト軽減にもつながるといことです。その好条件を最大限に生かして頭数が増えてくれば、草原の草は自然に短くなるわけです。草原の草が自然に短くなれば、阿蘇の草原維持において大きな問題である防火帯づくりや野焼きのことも自然に解決していきます。

最近では、食の安全性と健康志向が目目されてきています。阿蘇の自然を活用した草原の草をたくさん食べた牛は、サシは少ないかもしれませんが、そういう牛が阿蘇では自然にできるのです。ですから、熊本の地産地消、地元の人自分たちで食べるということはもちろんですが、全国の消費者にもアピールしていく。そして食べていただければ、草原は永久に維持され、農家の経営安定にもつながっていくと思います。そして、草原に点在する山村集落に元気が出てくる。元気が出れば、自然に草原は維持されていくのです。

ボランティアの皆さんに応援していただくことも必要ですが、ボランティアだけの草原維持は、非常に難しいと思います。やはり地元に住む人たちが頑張り、生活ができていけばいいのではないのでしょうか。

私は、都市と農村との交流という思いをもって、小さな運動をしています。まず都市の方に阿蘇に来ていただく。そして村の現状を知っていただく。次は、声をかけていただくとうれしいと思います。そのことによって、



嫌々ながら村に住んでいる集落の人たちが、草原を維持してるんや、きれいな水を作ってるんやという、誇りを持つことができるようになる。

村の中に、自分たちのくらしに誇りを持てる人たちが多くなってくれば、必ず山村集落に元気が出るし、阿蘇の草原も自然と維持されていくのではないかと思います。行政の方、研究者、いろいろな方々の力を借りながらやっていかなくてはならないと思っていますが、そういうことが大切ではないかなと思います。

何しろ村の人に声をかけてください。そして、村の人と仲良くしていけるということが、阿蘇の草原が維持されていく大きな要因になるのではないのでしょうか。

坂元 村が元気になるためには、どんどん都市の人たちも村に行って声をかけてくれと。その中から「いいね、いいね」と言われることが、本当に励みになって、結果的に草原の再生につながっていくのではないかという、お話だったかと思います。ここで、会場からどなたか、ご質問、あるいは今までのことを聞いて、「これは良かった」というようなことがありましたらお願いします。

会場 私は熊本市内に住んでいる高本と申します。生まれは阿蘇町で、大観峰の麓で育ち、市内の学校に通うため18才のときに阿蘇を出ました。今も兄弟が住んでいるので、20日に1回くらいは阿蘇に帰るので阿蘇のことはよくわかっているつもりですが、4点ほどお願いというか、提案をしたいと思います。

まず野焼きですが、これは大変な仕事です。しかし難しいのは輪地切りです。輪地切りに関しては、サポーターは無料ではダメだと思います。なぜ輪地切りをするのかというと、山火事にならないためにやるのですから、面積に応じて火災保険会社あたりから金を取り立てて、輪地切りの人に、長さに応じて、たとえば1キロくらいというかたちでお金を払えば、村の人たちの収入にもなりますから、そんなにゴツゴツいわなくてもできるわけです。

野焼きは1日で全部できます。これも無理矢理募集しなくても、阿蘇出身者に声をかけてやれば良いのです。だいたい3月20日という日にちもわかっていますから。これをひとつ提案したいと思います。

それから感想ですけど、井さん、長野さんは阿蘇の人ですからもちろんですが、高橋先生、よく調べていらっしゃると思いました。私達も初めて聞くようなことがありました。また、中村先生が、結局社会経済の面からと生態の面からどうするかということだとおっしゃいましたが、これはこの一言に尽きると思います。具体論で申し上げた今の野焼きの問題などがあります。

それから、スイスでは、観光客が見る牧野の景観維持のために、放牧手当という制度があるそうです。です

から阿蘇でも地域を指定して、放牧をして年間で1頭いくらかというふうにやったら、阿蘇の景観が保てると思います。

さらに、今阿蘇の原野が保たれているのは、入会権があるからだだと思います。その地域に住んどる人は、草刈に行くのも自由です。そのかわり、入会権が生じます。入会権が解消されれば、阿蘇の牧野は1、2年のうちに全て誰かが集めてしまって、なくなってしまうでしょう。小国町は昭和45年ごろまでに入会権を解消して、入会権者で分けたため、結局ほとんどが山林地主の手にわたってしまっています。だから阿蘇の原野はどんなことがあっても入会権は解消してはならないと思います。

それから、金田局長に景観の問題からお願いしたいのですが、観光客にとって阿蘇の魅力は、やはり風景がよく見えるかどうかということだと思います。

それで大観峰の道、古城ヶ鼻も坂梨も高森も同じなのですが、あの峠の下の杉の木の伐採の方法を考えてほしいと思います。私が概算計算したところ、大観峰は滝のところは4～5百メートルで、道の下は三本くらい下まで伐れば約1500本です。それから大観峰で途切れて町に近くなるとところの間くらいまでだったら1キロくらい、これが3500本、合わせて5千本くらい伐採すればいいのです。今木材は安いですから、1本3000円くらいとして、1500万くらいであそこの道沿いの森は伐採できます。どうか金田局長ぜひ検討してください。よろしく申し上げます。

坂元 ありがとうございます。もうおひとりどうぞ。



(図37: 会場からの発言風景)

会場 貴重な意見を伺いましたが、自分の牧野組合のことで発言させていただきます。本当に草原を再生するためには、私は畜産が一番と思っています。それには都市の人たち、観光に来られる人たちに、牛を眺めてもらいたい。

阿蘇登山道路では、登山にいらってもらうと思われていますが、牛馬優先という看板が立っています。わたしたちミルクロードの方は牛馬優先はありません。自分達は、皆さんに見てもらうためにも道路沿いに放牧したいのですが、道路から牛が出て事故にでもあったら大変ということで、なるべく道路沿いには放牧したくないので

す。そういう観点から、行政にもお手伝いしていただいて、ミルクロード全線で、牛が道路に出られないように擬木で牧柵をつくってもらえれば、みなさん観光に来られる方に、牛を眺めて牧野で牛が飼われとるなということを知ってもらい、楽しんでもらえると思うのです。そうしてもらったら私たちは嬉しい。そしてまた放牧して、皆さんに牛の放牧の風景なんかを写真でも撮ってもらえば、草原再生のシンポジウムが今日ありましたことが生きてくると思います。

坂元 率直なご意見を頂いたと思います。ありがとうございます。それでは、そろそろ時間も終わりに近づきましたので、パネリストの方々に短いコメントをお願い致します。高橋先生のほうから順にお願い致します。



(図 38：意見をとりまとめる坂元氏)

高橋 三瓶のほうですずっと草地の研究をされていて、草原を守るには牛もたくさん要るのだけど、人もたくさん要るというのが実感です。

水田を守る時も、例えば水路管理、1軒の農家が全部の水田を抱えても守れないのと同じで、人が増えないとなかなか草原は守れないというのが、私の実感です。ですから地域の人が増えることが果たして今後可能かどうかという心配をしています。

もう一つは農政との関わりですが、中山間地域等直接支払い制度が、幸いに5年間延長されるようになりましたが、5年後はどうなるか分かりません。その時に生産とは切り離れたかたちの補助金が果たして続くかどうか、これもまた深刻に考えていただきたい内容です。今の中山間地直接支払いは水田にかなり偏重していて、牧野の単価は非常に低いです。例えば水源を守っているとか、あるいは希少な植物を守っているとか、あるいは都会の人にすばらしい場所を提供しているということに対価が払われないというシステムなのです。今後新しい直接支払い制度が生まれるかどうか分かりませんが、私は阿蘇を舞台にするのだったら、野焼きをして管理している人に、国民がお金を払うようなシステムを農林水産省なり環境省のほうで考えていただきたいというのが本音です。

井 先程お話ししましたように、私は、草原と牛は切り離せないと思っており、問題は外圧による価格格差による国産肉用牛の減少だったと思います。ただこの問題は、最近のBSEの問題発生以降持ち直してきたので、いまはいい方向に進んできています。

結局、牛が増えることが草原再生に一番大切だということで、草原の権威者の大滝先生の本を見ますと、牛肉1キロを食べていただくと、1反の草原が維持されていくという研究をなさっています。

それから牛だけではなくて、草原の草を使った堆肥を使って野菜を作り、草原再生シールを貼って売るという活動はとても重要です。化学肥料を減らしてもう1回土づくりから考え、草を豊富に使った土からできた野菜、そういうものをアピールしていかにかいかんと思います。先日市内の鶴屋デパートで販売したときは、非常に好評でした。

来年度は4月から、環境省のご協力をいただき草原の草を使った堆肥からできた低農薬なり無農薬の野菜をつくる生産者の組織づくりをしていきたいと思っています。私は草原再生を牛だけで攻めていくという思いがあったのですが、牛だけではなくて、草原の草を使った野菜も利用していきたい。

そこで、新井所長さん、例えば5キロのトマトを何百人の人が食べると草原の草が何百キロ使われ、その結果として何㎡の草原が維持されるというような計算は面白いと思います。

農家の人が市内に出向き自ら消費者にお話して販売したい。まず熊本からはじめて、福岡にも行ってそういう話をしながら販売をしていきたい。

まず農家の人の所得が上らんといかんわけです。その所得が上がる方法というのは、今言ったようにたくさんあります。こういう取り組みを皆さん農家の人たちと協力しながら進めていく必要がある。消費者の方には、そういうことでも応援していただけたら、ありがたいと思います。

長野 阿蘇では、先程客席のほうからありましたように、約6割を占めていると言われる森林の問題があります。30年も50年もたてば立派な木になるわけで、それを伐採したあとどうするのか。またスギ、ヒノキを植えるのか、草原に戻すのかとか、そういう話もいつかやっていただきたいと思っています。

もう一つは、例年阿蘇で行なわれていたというこのシンポジウムが、今回熊本市内で行われた意味を皆様にはもう一度考えて欲しい。熊本の自慢としての阿蘇を、熊本県内に住んでいる人たちにもっと認識していただくことで、非常にいい幸せな空間である阿蘇を大事に見てもらえるといいのではなからうかと思いました。

中村 楽しかったです。もうちょっと会場からの意見を聞きたかったところです。いろいろな意見を聞いて、また北海道に帰って自分も頑張ろうと思います。ありがとうございました。

金田 会場のほうからご要望がありましたが、私どもは申し上げましたように、よろず屋でございます。そういった意味から致しますと、多面的に検討をしなければならない部分がございます。林地の問題、草原の問題、両面から検討し、その価値というものについて理解が得られるようなかたちの中で整備をさせていただきたいと考えています。

もう1点ミルクロードに牧柵の整備ができないかというご提案がありましたが、これもまさしく皆様のご要望が結集されるかどうかによるのではないかと考えています。ミルクロードは、もともと有料観光道路というかたちの整備をし、それが無料化されたものです。

そういった意味で、果たして途中で止まって牛を見ていただく場所として大丈夫かどうかということも今後検討していかなければならない。

まず皆様方の意見を結集させていただきたいと思います。そうでないと逆の答えも出てくる可能性があると思うのです。これが、私のほうからお願いでございます。専門家の先生方、貴重なご意見を賜り、ありがとうございました。会場の皆様方もありがとうございました。

引地 個人的な感想を含めてお話ししますと、今日はたまたま草地在りテーマでございますが、やはり自然環境、自然保護は、草地だけを切り取って考えても難しいのだと思いました。

例えばヒゴタイを保護したくてもヒゴタイだけの保護はできないわけです。人間との関わり合いがあるわけですから、阿蘇の山とその周辺の例えば集落、田んぼ、畑、こういう所までトータルで考えていかなければいけないと感じました。

そういう意味では、阿蘇の草原とあか牛は、阿蘇草原再生のシンボルではないのかなと改めて思います。また、阿蘇では、自然環境の保全、畜産の振興と、やはり周辺の集落の村興しは、同じレベルで、トータルで考えていかなければいけないし、言ってみればコインの裏表のような感じが致します。

自然環境というのは、まさに人間の作用あるいは自然の作用ですから、関わりあうものや人がたくさんあるということをつくづく感じ、行政として、今後いろいろな意味でまた勉強しながら頑張っていきたいと思います。

新井 本日は、中身の濃いシンポジウムにいただきまして、本当にありがとうございます。もっとフロアの方からいろいろなご意見、ご要望をお聞きできればと思

いましたが、時間の関係がございますので、アンケートにお書きいただいたり、後日インターネットやファックスなどでご意見をいただければ幸いです。

阿蘇の価値については、長野さんから、子供たちは教室の中では阿蘇についてそれなりの教育を受けているというお話がありましたが、阿蘇の自然の魅力は、体感することが一番大事かと思っています。そういった意味で、環境省では、今、地元の子供たちを対象にした教材づくりを進めており、先生方にも副読本を渡そうと考えています。まずは、地域の子供たちに阿蘇のすばらしさを体感してほしい。また、この会場にお越しの方々を含め、熊本市、熊本県内の方々にも阿蘇のすばらしさを体感してほしい。それを踏まえて、この阿蘇草原の取り組み、地域興しに何らかの形でご参加いただければと思っています。

環境省は懇談会とか検討部会を設けているいろいろのご意見を聞きながら、オープンな形で事業を進めてきています。来年度以降、どういうかたちで進めていくかはこれから考えないといけないのですが、地域の方々の声をお聞かせいただきながら、全体として方向付けをいただき、行政として担うべき部分を展開をしていくことになるかと思っています。そういった意味で、今日のシンポジウムをきっかけとして、より一層阿蘇に対して関心を持っていただき、いろいろなかたちでご参加、ご協力をいただければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

坂元 ありがとうございます。昨年の8月に「スローな阿蘇づくり～阿蘇カルデラツーリズム」という取り組みで、アンケートを取りました。その中で、阿蘇地域の満足度を調査した結果、一番大きかったのが、「阿蘇独特の自然」で約80パーセント、その次が、「心身の癒し」で、70パーセント近くあり、自然、それから体や心の癒しになるという点で、阿蘇の草原が大きな魅力になっているという結果でした。こういったことも踏まえて、私たちが阿蘇という価値、あるいは阿蘇の草原というものをどういうふうに考えていくか。いろいろな示唆をいただいたと感じました。

また、私たちの阿蘇を自分たちがどうしていくのかという、地域の取り組み、あるいは地域からの本当のニーズというものが重要だとも思いました。

自分たちの地域をどういうふうにしていきたいのかというビジョンの中で草原を位置づけ、そしてその価値を築くことによって、将来の阿蘇というものを見据えていく。そのようなビジョンが必要だと考えたところです。農水省や環境省、いろんな部署が複雑に絡みあっている中で、一つ一つ糸をほぐしながら、この草原問題に今後取り組んでいかなければならないと感じています。

今日は長時間にわたりパネルディスカッションにご参加いただき、ありがとうございました。 以上